

# 明治の鼓動を今に伝える

## ～ 電力事業黎明期創設の発電所 黒北発電所 ～

はじめに

宮崎県宮崎市清武町の黒北地区にある黒北発電所は、我国の電力事業黎明期の1907（明治40）年に創設されました。当時の宮崎県には県北部の北方村（現、延岡市北方町）の槇峰鉱山で事業用水力発電所としてすでに稼働していた槇峰第一発電所がありました。しかし、一般供給用の水力発電所として創設され、人々の暮らしに「電燈」という画期的な生活の変化をもたらしたという点で、黒北発電所は、宮崎市のみならず宮崎県の電力事業を語るうえでも大きな意味をもちます。とりわけ、この黒北発電所が近代化遺産として高く評価される理由として、操業開始から現在に至るまで当時の建屋が大きな改変を受けずに使用され続けているだけでなく、開設当初に設置されたドイツ製の水車と発電機が今も現役で稼働していることがあげられます。この点について、黒北発電所という存在は全国的に見ても稀有な事例であると言えます。



操業から間もない黒北発電所（宮崎縣大観より転載）

以下、黒北発電所の概要等を列記します。

### 1 発電所の概要

名称	黒北発電所
区分	一般供給用水力発電所
所在地	宮崎県宮崎市清武町船引字川平3544
管轄	九州電力株式会社
創設年	1907（明治40）年



発電機に取り付けられた才賀電気商会のプレート

### 2 黒北発電所開業前後の県内のおもな出来事

- 1879（明治12）年 延岡に宮崎県初の銀行「第百四十五国立銀行」が開業する。
- 1883（ // 16）年 宮崎県再置
- 1885（ // 18）年 宮崎県師範学校開校
- 1888（ // 21）年 最初の新聞『宮崎新報』創刊

- 1889 ( // 22)年 町村制施行
- 1897 ( // 30)年 槇峰鉦山に本県初の水力発電が認可される
- 1902 ( // 35)年 宮崎県立図書館開館
- 1907 ( // 40)年 8月、日向水力電気株式会社が開業し、宮崎町に電灯がともる。**  
10月、皇太子行啓
- 1913 (大正 2)年 官幣大社宮崎宮を宮崎神宮と改称
- 1918 ( // 7)年 武者小路実篤を代表とする「新しき村」が開村する。
- 1923 ( // 12)年 国鉄日豊本線が全通開通する。
- 1924 ( // 13)年 宮崎と都城で市制施行

### 3 水力発電と火力発電

#### (1) 水力発電

1888（明治21）年に宮城紡績会社（宮城県仙台市）によって創設された三居沢（さんきよざわ）発電所が、記録に残る発電所としては日本で最初の水力発電所とされています。三居沢発電所のほかの操業時期が早いおもな火力発電所は次のとおりです。

- 1888 (明治21)年 三居沢(さんきよざわ)発電所 (宮城県)
- 1891 (明治24)年 蹴上(けあげ)発電所 (京都府)
- 1893 (明治26)年 日光発電所 (栃木県)
- 1898 (明治31)年 小山田発電所 (鹿児島県)
- 1898 (明治31)年 槇峰(まきみね)第一発電所 (宮崎県)
- 1900 (明治33)年 竹田第一発電所 (大分県)
- 1907 (明治40)年 黒北発電所 (宮崎県) ※ 現役最古級の建屋

※ 黒北発電所が発電・電力供給を開始した明治40年までに、県内では5つの発電事業が認可を受けていましたが、この中で一般供給を目的とする水力発電所は黒北発電所のみでした。

#### (2) 火力発電

水力と並ぶ発電手段として早くから着目された火力発電は、1887(明治20)年に日本橋茅場町にあった発電所がその最初とされています。前述の三居沢発電所と同じ頃ですから、水力発電も火力発電所も近しい時期にその産声を上げたこととなります。宮崎県内ではおよそ20年ほど遅れて黒北発電所が操業を開始し、発電事業が徐々に拡大していきませんが、水力発電が中心で火力発電は大規模工場での事業用自家発電に限定されています。

#### 4 黒北発電所の創設へと導いた人々

黒北発電所の創設には、柴岡晋・大和田傳蔵・才賀藤吉という3人のキーパーソンが存在します。

##### ◆ 柴岡 晋 (しばおかすすむ) 1848(嘉永元)年－1923(大正12)年

高知県宿毛市出身。明治元(1868)年戊辰戦争に従軍し、幕府軍の追討に加わり山形県庄内で勲功を立てました。明治16(1883)年、宮崎県都城警察署長、県警本部第一課長などを歴任します。退官後は、明治29(1896)年、宮崎に転居。柴岡は1900(明治33)年4月に大和田伝蔵とともに電気事業計画の交渉のため、県内外を奔走してその必要性を説いて回ります。大正4(1915)年には日向水力電気株式会社の社長にも就任し、その他にも宮崎軽便鉄道の監査役なども歴任しました。

##### ◆ 大和田 伝蔵 (おおわだ でんぞう) 1850(嘉永3)年－1935(昭和10)年

宮崎県高千穂町出身。1867(慶応3)年、延岡藩士大和田家の婿養子となりました。1877(明治10)年、西南戦争後に宮崎町に転居し、国立百四十七銀行(現鹿児島銀行)支店長を務めます。

退職後、実業界に入り他県での蚕糸業の盛況ぶりを聞き、延岡藩士遠山克太郎とともに宮崎町に製糸工場を設立、蚕糸業の発達に尽力するなど、当時の県経済界にあって大御所的な存在でした。

##### ◆ 才賀 藤吉 (さいがとうきち) 1870(明治3)年－1915(大正4)年

大阪府出身。電灯会社に技術見習工として入社したことが電気業界との最初の接点となり、その後、和歌山紡績、摂津紡績など数社の電気機器据付工事に従事しました。電気技術者としての技能を高く評価され、明治26(1893)年に東京三好電気工場に職工として入社後、1896(明治29)年には京都寺町仏光町に才賀商会を設立しました。

事業は時流にも乗り順調に拡大し、伊予水力電気、松阪水力電気等の工事に成功し財をなしました。黒北発電所の発電機のプレートにある「才賀電気商会」は、これらの資金を基に開業したものであり、大阪市今橋に大規模な社屋を開設し「電気界の霸王」と称されました。

日向水力電気株式会社の創設に当たっては、柴岡晋と大和田傳蔵の熱意に応え経営にも参画し、同社株式の大半を所有し自ら社長に就任しました。この他、県内では都城電気、油津電気の発起にもその名を連ねています。また、宮崎軽便鉄道の創立にも参加し、取締役役に就任しました。

1908(明治41)年には愛媛県から立候補して衆議院議員となり、1912(同45)年に再選も果たします。しかし、才賀電気商会の業績は次第に悪化し、1912(明治45)年に事業は破綻、才賀はその後に病を患い1915(大正4)年に46歳の若さで亡くなっています。

#### 5 黒北発電所の開設経緯

宮崎で電力事業を展開したいと考え、県内外を奔走した柴岡晋、大和田傳蔵という二人の人物の熱い思

いが黒北発電所の開設へと導いたことは間違いありません。しかしながら、先行投資と安定した収益のバランスを考えながら電力事業を継続していくノウハウが柴岡、大和田の両氏には十分とは言えませんでした。熱意を形へと変えるもの、それが才賀藤吉という人物の存在だったのです。

才賀藤吉の事業展開の特徴として、電力事業展開の市場開拓があげられます。既存の電力事業者が有する市場の切り崩しではなく、積極的に地方へ出向き、規模に関わらず事業の可能性を模索し続けました。記功碑に刻まれた「文明之化遠及僻陬（文明の化、遠く僻陬に及ぶ）」という言葉は、この姿勢を端的に示しています。「僻陬（へきすう）」すなわち「辺鄙な田舎の土地」であった宮崎での電力事業展開は、電気界の霸王と称された才賀の存在があって初めて実現しえたと言っても過言ではないでしょう。

#### 【黒北発電所が給電を開始するまでのおもな流れ】

- 県知事の許可を得て青島村を流れる鵜の木川上流の鏡洲付近を調査、発電量と工事の困難さからこの地での精査は中止となります。
- 次候補として清武川上流の黒北地区でその北岸を、県技師松浦円四郎が実測。有望と分り会社設立の準備にかかります。
- 1902(明治35)年7月、電気事業で成功していた才賀藤吉に書面を送り、初めて同氏と交渉。
- 1903(明治36)年4月、柴岡、大和田両氏は、松山の才賀氏を訪問し、現状を伝え現地視察を要請。
- 才賀氏は二人の希望を受け入れ来県、計画の見直し(北岸から南岸へ)や資金調達について協議。
- 1904(明治37)年に日露戦争が勃発し、会社設立は一時中断。
- 1906(明治39)年3月、柴岡等が松山にて才賀氏と協定書を締結。4月、株式募集発表。
- 1906(明治39)年5月15日、設立総会が開かれ日向水力電気株式会社(資本金10万円)が設立。
- 1907(明治40)年8月、日向水力電気株式会社が開業し、宮崎町に電灯が点灯。

## 6 「文明の化」 宮崎の町を照らす

### 日州神武

日州宮崎の神武さま 而（しか）も大社の真前で  
お灯明が三人出会(であい)して 先なるお灯明は種油(たねあぶら)  
中なるお灯明は石油灯 後なるお灯明は電気灯  
先なる種油の言ふことに 初め石油灯の出でしより  
暗い暗いとあざけられ 押入のすみへと打やられ  
中なる石油灯の言うことに 初めて電気灯の出でしより  
危険危険とけなされて 元のタンスへ戻された  
後なる電気灯の言ふことに 初めて妾(わたし)の出でしより  
マッチ入らずに火がついて 風が吹いても消えやせぬ  
サアサ ツケツケ トツツン シャン

7 記功碑について

黒北発電所の入口に、明治44年に建立された記功碑があります。題字の「利用天物」は才賀藤吉が揮毫し、多賀谷良策が碑文を作し、書も手がけています。多賀谷は才賀電気商会で起業課長や営業部長を務め、後に丸一商事工業会社の社長となった人物で、漢文にも秀でていました。

記功碑は、当初発電所のある場所から西に約350mにある沈砂池に建てられていましたが、一般の方にもご覧いただけるように、九州電力の方で現在の場所に移設されました。

下の右の写真は、ひかり拓本による拓影で、左が碑に刻まれた碑文になります。

# 物天用利

記功碑  
 国家之富強不可不待於工業之隆昌而工業之隆昌不可不賴於動力之費少  
 而利者尚未多一日柴岡晉氏乘汽車途次会有榜人頻說其利者傾聽久之  
 興利益國之念未多一日柴岡晉氏乘汽車途次会有榜人頻說其利者傾聽久之  
 志相地於鴨木川上游將起工而以地利失宜則己之明年十一月再相地於清  
 武川上游北岸測量設計成而以無經驗之人創無經驗之業其利未學于民  
 心人皆危疑無肯投資者大極困難偶聞才賀藤吉氏夙投巨資于柴岡大和  
 富閥歷適在伊予松山寄書請添一臂之力者數矣三十四年四月柴岡大和  
 二氏親松山到面訴其情何圖前車中之人即是也大驚其奇遇議忽決乃誘  
 氏與歸就而相地形氏一見輒說北岸不若南岸之利及測量成果如其言衆皆  
 服其達識時有府廳合之議繼而征露之役興議中止越三十九年柴岡氏與  
 岩切與平氏再訪才賀氏於松山申前議年五月會社創成八月開業始知其利  
 氣株式會社資金拾萬馬力於三月九日起工翌年七月告成八月開業始知其利  
 家競用之百般器機待之而動夜則輝煌耀現不夜之城文明之化遠及僻陬  
 其所以資于國家之富強者洵不尠少也乃記創業之難勒石以垂功于無窮  
 守成之人云  
 明治四十四年十月上浣  
 日向水力電気株式会社建立  
 才賀藤吉氏題字  
 多賀谷良策撰并書



明治の終わりに建てられた碑ですので、経年劣化により碑文の文字がやや不鮮明になってきています。しかし、碑石に刻まれた一文字一文字からは、一般家庭に電気が供給され電燈が灯るといった画期的な社会の変化を謳歌する人々の思いを感じ取ることができます。

以下が碑文の試読です。

【試読】

記 功 碑

才賀藤吉氏題字

多賀谷良策選并書

国家の富強は、工業の隆昌（りゅうしょう）を待たずんばあるべからず。而（しか）して工業の隆昌は、動力の費（つい）え少にして利多き者に頼らずんばあるべからず。これ近歳（きんねん）、水力電気事業の各所に勃興（ぼっこう）する所以（ゆえん）なり。而（しか）るに十数年前は、我が国人、其の利を識（し）る者、未だ多からず。一日（いちじつ）、柴岡晋氏、汽車に乘じ途次（とじ）、傍人（ぼうじん）頻（しき）りに其の利を説く者有るに会し、傾聴（けいちょう）すること久し。興りて国を利益せんとするの念、日夜止まず。明治三十三年四月、遂に大和田傳蔵氏等と胥謀（あいはか）り、同志を募り、鶴木川上游（じょうりゅう）に地を相し、将（まさ）に工を起こさんとす。而るに地利、宜（よろ）しきを失するを以て、乃（すなわ）ち己（や）む。其の翌年十一月、再び清武川上游北岸に地を相し、測量設計咸（ことごと）く成る。而るに無経験の人、無経験の業を創（はじ）むるを以て、其の利、未だ民心に孚ならず。人皆危疑し、敢（あ）えて投資する者無きを以て、大いに困頓（こんとん）す。偶（たまたま）才賀藤吉氏の夙（つと）に巨資を電気事業に投じ、頗（すこぶ）る閱歴（えつれき）富めるを聞く。適（たまたま）伊予松山に在り、書を寄せ一臂（いっぴ）の力を添えんことを請うこと数（たびたび）なり。三十六年四月、柴岡・大和田の二氏、親（みづか）ら松山に到りて面訴（めんそ）し、其の情を訴う。何圖（なんと）前歳（ぜんねん）、車中の人、即（すなわ）ちこれなり。大いに其の奇遇を驚き、議忽（たちま）ち決す。乃ち氏を誘い與（とも）に帰らしむるに就（つ）き、地形を相せしむ。氏、一見するや、輒（すなわ）ち北岸は南岸の利に若かずと説く。及び測量の成果、其の言の如く衆皆其の達識（たっしき）に服す。時に府県廃合の議有り。継いで征露の役興（おこ）り、議中止す。越えて三十九年、柴岡氏、岩切與平氏と才賀氏を松山に再訪し、前議を申す。同年五月、会社創成し、名を日向水力電気株式会社と曰う。資金拾萬、馬力三百。同年九月起工し、翌年七月告成、八月開業す。始めて其の利を知るや家々競いて之を用い、百般（ひゃっぱん）の器機、之に待ちて動き、夜は則ち煌耀（こうよう）として光り輝き、不夜の城現る。文明の化、遠く僻陬（へきすう）に及ぶ。其の国家の富強に資する所以は、洵（まこと）に尠少（せんしょう）ならざるなり。乃ち創業の難を記し、石に勒（ろく）して以て功を無窮（むきゅう）に垂れ、守成（しゅせい）の人に告ぐと云う。

明治四十四年十月上浣（じょうかん）

日向水力電気株式会社建之

《語句解説》

隆昌（りゅうしょう）	盛んなこと。栄えること。隆盛。
一日（いちじつ）	ある日
胥謀（あいはか）る	複数人間が互いに相談して一緒に物事を企てること。「相謀る」に同じ。
閱歴（えつれき）	人が今まで社会的にたどってきた跡。経歴。履歴。
一臂（いっぴ）	わずかな力、助け。力添え。
面訴（めんそ）	直接顔を合わせて訴えること。

達識（たっしき）	物事を深く見通す力
百般（ひゃっぱん）	いろいろな方面。いろいろなことから。
煌耀（こうよう）	光り輝く様子。または、その光り輝くものそのもの。
僻陬（へきすう）	中心から遠くはなれていて開けていないこと。片田舎。
尠少（せんしょう）	きわめて少ないこと。
勒（ろく）	彫る・刻む
無窮（むきゅう）	永遠。無限。
守成（しゅせい）	創業者が築いた事業や地位・功績を、後継者が受け継いで維持・発展させること
上浣（じょうかん）	月の初めの十日間。上旬

#### 参考文献

- 『宮崎縣大観』 宮武喜三太 編著 青潮社 1984
- 『宮崎県近世社会経済史』 小寺鉄之助 著 宮崎県史料編纂会 1958
- 『宮崎県における電気事業の沿革』 九州電力宮崎支店 1963
- 『うるまの灯：沖縄の電力事業史』 古堅哲 著 日本電気協会 1980
- 『財界名士失敗談（下巻）』 朝比奈知泉(碌堂) 編 毎夕新聞社 1909
- 『日本電気技術者伝』 田村栄太郎 著 科学新興社 1943
- 『電気工学8（4月號）』 技能図書出版社 1919